

2025

11

No. 750

國學院大學 学部

国学院大学

令和7年11月20日(木) 定期号(毎月20日発行) 1部20円
[発行]国学院大学 [編集]総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28 [電話]03(5466)0130 [FAX]03(5466)0528

祭 儀 ■ 月次祭・新嘗祭 12月1日(月) 午前10時 神殿

ことぶれ

一風のあと

新企業創出における地域コミュニティーの役割

経済学部・小野正人教授



研究者に聞く

4・5面に続く



日本の「宗教」と「無宗教」

研究開発推進機構・星野靖二教授

近年、オンライン学習の急速な普及により、学びのあり方が大きく変わりつつあります。教室でのみ行われていた講義が、自宅や電車内でも受講可能となつた時間や場所に縛られない柔軟性は、学びの機会を広げ、多様な背景をもつ人々に新たな学習の道を開いています。とりわけ注目されるのが、社会人によるスキル習得で、専門講座や動画教材を通じて、短期間で能力開発が可能となつたことです。この流れは、職を目指す人々には強力な武器となり、これまでの学歴偏重の就職市場において、新たに評価軸を提示し始めています。しかし、オンライン学習には課題も多い。長時間は

続の難しさだ。教室での対面授業に比べ、孤独感を抱きやすく、モチベーションの維持が困難になりやすい。また、学びを深める上で不可欠な「対話」や「偶発的な出会い」が乏しくなることも、学びの質に影響を与える▼大学は「ハイブリッド型教育」の設計が求められている。知識の伝達はオンラインで、議論や実習は対面で行うなど、それぞれの特性を生かす工夫が進められている。教育とは、単に知識を得るだけではなく、人と人との関わりの中で育まれるものだ。デジタル技術の恩恵を生かしつつ、血の通った学びをいかに守るかが大学に課された問いである▼学びのかたちは変わつても、その根底にある「知を求める心」は変わらない。私たちは今、その原点に立ち返り、未来の学びを再設計する時代のただ中にあるのかもしれない。



創立記念祭および 関係物故者慰靈祭を執行

学校法人国学院大学は、11月4日に母体である皇典講究所創立から143年を迎えるにあたり、1日に創立記念祭および関係物故者慰靈祭を渋谷キャンパスで執り行つた。

創立記念祭（斎主＝大野靖仁・法人参事・神殿奉斎員）は神殿で斎行され、佐柳正三理事長、針本正行学長らが参列し、本法人および設置校のさらなる発展を祈念した。その後の直会では、佐柳理事長が「少子化の波が法人傘下各校にも確実に表れてきてゐるが、それぞれが与えられた役割の中で最大の力を發揮し、未来に向かって進んでもいくことが重要だ」とあいさつした。

関係物故者慰靈祭（斎主＝星野光樹・神道文化学部准教授、神殿奉斎員）は、創立以来物故した役教職員や学生生徒、とりわけこの1年間に亡くなつた法人傘下各校の関係者の御靈を迎え、百周年記念館記念講堂で執り行われた。佐柳理事長、針本学長、佐柳をはじめ、法人、大学の役教職員、遺族、学生らが参列。斎主による祭詞奏上の後、学生の奉仕による慰靈の舞や、フォイエル・コール混声合唱団による追悼歌などが奉納された。佐柳理事長、針本学長に続き、ご遺族や学生代表らが祭壇に玉串を捧げ挙げし、物故者をしのんだ。

主な内容 2面／渋谷区民大学講座 文学と美術史の視点で江戸文化を語
4・5面／研究者に聞く 6面／令和8年度 学費一覧

3面／人間開発学部 学びの成果を地域に還元

最終面から K:DNA **I面**／陸上競技部 全日本大学駅伝 4位
野中選手が3区 区間賞 **II面**／男子卓球部 10年ぶり1部昇格 入れ替え戦で劇的勝利



令和7年度渋谷区民大学講座「葛重・歌麿とその時代—浮世絵と出版文化」が10月18日、渋谷キャンパス常磐松ホールで開催された。

この講座は、地域連携事業の一環として平成26（2014）年から開講しており、現在は、平成29年に締結された「S-SAP（シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー）協定」に基づいて、地域連携事業の一環として実施している。今回は、中村正明・文学部日本文学科教授と、藤澤紫・同哲学科教授が登壇し、NHK大河ドラマでもおなじみの「葛重」と葛屋重三郎と、人気の浮世絵師である喜多川歌麿を取り上げて講演を行った。

日本文学科教授が登壇した。江戸時代の出版文化と戯

作を専門とする中村教授が登壇した。

まず、当時の江戸の本屋は、漢籍や古典籍といつた学術的な内容の本を扱う書物問屋と、葛屋重三郎など庶民向けの娯楽書を扱う地本問屋の大きく2種類に分けられると紹介。「地本」とは「その土地で生まれた本」を意味し、当

時、文化の中心地であった上方（関西）からの「下りもの」とは一線を画す、江戸独自の文化を創造するのだとい

う概が込められた言葉であったと説明した。また、葛屋重三郎が手掛けた多

彩な出版物を紹介し、江戸におけるメ

ディアとしての出版の役割と社会への影響を解説した。

続いて、日本美術史、特に浮世絵を専門とする藤澤教授が登壇。浮世絵の制作において、版元は単なる本屋ではなく、「プロデューサー」あるいは「企画立案者」としての役割を担っていたと述べ、喜多川歌麿について、自分が葛屋重三郎との関わりを説明しながら葛屋重三郎との関わりを説明した。最後には、本学所蔵のコレクションの数々を、写真を交えながら紹介した。

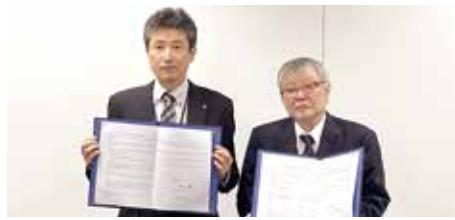
講演に続いて行われたトークセッションでは、両名が登壇し、文学と美術の垣根を越え江戸文化の本質に迫りました。藤澤教授が「江戸時代の文

学作品や浮世絵は、一見すると楽しい

ことばかりの時代に見えるかもしれない。しかし実際には、地震や洪水とい

う思いで、明るい作品を生み出していく

市川市教育委員会との連携協定を締結



国学院大学（学長・針本正行）と市川市教育委員会（教育長・高木秀人）は11月11日、相互に密接な連携を図り、歴史的財産を有効に活用した協働による活動を推進し、地域社会の発展及び市民サービス、教育・研究と人材育成の向上に資することを目的として協定を締結した=写真。

◆連携・協力事項 □博物館における資料保存に関する事項 □博物館における資料活用に関する事項 □人材育成に関する事項 □学際的研究および教職員等の人的交流に関する事項 □その他、知見等や知的財産等を生かし、連携及び協力することができる事項

留学へ向け Go Global Weekを開催

海外留学を希望する在学生へ向けた説明会や個別相談を行うGo Global Weekが10月6日から10日にかけて渋谷キャンパスで開催された。

8日には国際交流課職員による令和7年度春期短期留学説明会を実施し、留学プログラムの特徴や現地での生活について説明した。また、昨年度に同プログラムを利用して留学した学生が登壇し、自身の体験談を紹介。現地での授業の雰囲気や留学を通じて得たことなどを語った。

フレンドシップファミリー交流会を開催



国学院大学で学ぶK-STEP留学生と、フレンドシップファミリーとの交流会が10月18日、たまプラーザキャンパスの調理室で開催された=写真。

今回は、留学生と受け入れのファミリーごとに6グループに分かれ、肉じゃがを作りに挑戦。留学生らは包丁や菜箸を使いこなし、慣れない日本の家庭料理を調理した。煮込みの待ち時間には、食文化や故郷の話題で歓談が弾み、食事中も交流を深めた。15年以上フレンドシップファミリーを務める参加者は「これまで関わった学生たちの多くは、再来日のときに必ず会いに来てくれており、関係がずっと続いていることをうれしく思う。今回も魅力的で、学生に出会うことができた。日本を楽しんでほしい」と笑顔で語った。

国際交流バスハイクで学生たちが交流



国学院大学学生部が主催する国際交流バスハイクが、10月19日に実施された。この企画は、留学生を含む学生同士の交流を目的として毎年開催されており、今回は教職員の引率の下、約40人が参加した。

今回は、東京都から山梨県にかけての地域をめぐるバス旅行を行った。渋谷キャンパスを出発した参加者らは、甲斐国一宮浅間神社（山梨県笛吹市）を正式参拝し、古屋真弘宮司（昭55卒・88期神）から浅間神社の成り立ちなどについて説明を受けた。その後は観光農園に移動し、バーベキューとシャインマスカット狩りを楽しんだ=写真。

道中のバス内では、アイスブレイクを実施。「日本で一番驚いた習慣は?」「日本料理といえば?」などのお題に対して、ペアになって留学生の回答を予想する「以心伝心ゲーム」を通して親睦を深めた。

公開学術講演会 奥深い信仰世界の理解を

国学院大学研究開発推進機構が主催する公開学術講演会「頑れる神々の中世」が11月8日、渋谷キャンパスで開催された。今回の講演会は本学博物館で開催されている企画展「中世日本の神々—物語・姿・秘説—」に関連して実施され、約250人の聴講者が参加した=写真。

冒頭、笛生衛・同機構長（神道文化学部教授）が、企画展について触れつつ「講演の内容から、展示されている神々のイメージの背景にある奥深い信仰世界の理解を深めてもらいたい」とあいさつ。続いて、阿部泰郎・龍谷大学客員教授および名古屋大学高等研究院客員教授が講演を行った。阿部氏は、中世初頭に源頼兼によって編まれた『古事記』の中から、神々が顕現する説話を紹介し、その説話をめぐるテクストの変遷や絵画に描かれた神々の姿を丁寧にひもときながら、中世における神の顕現の諸相を詳述。参加者は資料を丹念に読み込みながら熱心に聴講した。



アカデミック・スキルズ講座

資料作成のスキルを学ぶ



令和7年度アカデミック・スキルズ講座が10月14日から11月12日にかけて渋谷・たまプラーザの両キャンパスで開催された。この講座は、学修に対する学生の不安解消を目的に開催されているもの。今回は同講座の第6弾と第7弾として「一生モノのスキルを学ぶ」伝わる!パワポデザイン講座」をテーマに、教育開発推進機構の内村慶士助教=写真=が講師を務めた。

第6弾は基礎編で、内村助教が分かりやすい資料作りの基本を解説。第7弾は実践編で、基礎編の内容を踏まえつつ、グラフや図解の効果的な活用法を説明した。参加した学生たちはITサポート室の専門員によるアドバイスを受けながらスライド作成のワークにも取り組んでいた。

人間開発学部 学びの成果を地域に還元



人間開発学部が主催する第16回共育フェスティバルが10月26日に開催された。この催しは、学生たちが日々の学びの成果を生かし、地域の子どもたちや保護者と交流を深めながら「共に育つ」ことを目的に開催されている。今年のテーマは、共育フェスティバルに

たまプラーザキャンパスを拠点とする人間開発学部は、同学部の学生が主体となって企画・運営する恒例の地域交流イベントを開催した。

共育フェスティバル

当日は地域の親子を中心に、約80人が来場し、蜜ろうキャンドル作りなどの工作や参加型コンサートなど、さまざまな企画を通じて楽しみながら学べる16種類のプログラムに参加した。子どもたちからは、「一緒に歌ったり踊ったりで楽しかった」との声が聞かれるなど、キャンパスは終日にぎやかな雰囲気に包まれた。

運営に尽力した学生は、「子どもたちに元気をもらい、大盛況となった。子どもと関わるのはやはり楽しい」と充実した表情で語った。

地域交流スポーツフェスティバル

同学部地域ヘルスプロモーションセンターの主催による第10回地域交流スポーツフェスティバルが10月19日に開催され、子どもからシニア世代まで約330人が参加した。

今回は「LINK～未来へつなぐ、笑顔のバトン～」をテーマに掲げ、運動施設や測定器具を生かした体力測定や運動体験などの9企画を行った。部会による企画も実施され、第10回を記念して蹴球部はサッカー元日本代表の鈴木隆行氏、準硬式野球部は元侍ジャパンの内川聖一氏をそれぞれゲストに招き、体験教室を行った。準硬式野球部の企画に参加した小学生は「野球は



あまりやったことがなかつたけれど楽しかった。忍者道場の企画がおもしろくて何回も挑戦した」と、さまざまな姿を見られてうれしい」と笑顔を見せた。

同センター支援学生の会 ちーへる

による企画「ハロウィンの森へようこそ!」ブースを担当した学生は「みんなで企画を作り上げた。準備は大変だったが、無事に来場者が楽しんでいる体验を通して楽しみながら学べる」と笑顔を見せた。

—前編— わたくしたちがもつ「無宗教」という誤解

ほしの・せいじ
博士（文学）。専門は宗教学、近代日本宗教史。主な著書に『近代日本の宗教概念——宗教者の言葉と近代』（有志舎、2012年）、『日本仏教と西洋世界』（共著、法藏館、2020年）、『*Buddhism and Modernity: Sources from Nineteenth-Century Japan*』（共著、ハワイ大学出版会、2021年）、『キリスト教文化事典』（共編著、丸善出版、2022年）など。

全編はこちらから



後編



前

新たな「宗教」に触れて捉え直されてきた日本における「宗教」

「宗教」という言葉から、どんなイメージを抱くでしょうか。さまざまな宗教を包括できるようないわば、個別具体的な宗教を思い浮かべる方もいることでしょう。

私が専門としている宗教学においても、宗教とは何かについて、いまだに誰もが納得するようなはつきりとした答えはでていません。とはいっても、宗教学の歴史を振り返ってみると、宗教は普遍的に存在するという考え方がある議論の前提とされていた面があります。つまり、古代から現代まで、どんな時代でも、どんな国・地域であろうとも、共通の普遍的な性質をもつた宗教というものが存在する、という考え方ですね。

対して、近年では、そうした時代や国・地域を超えて普遍的に存在する宗教というようなイメージを、簡単に前提にしてしまってはよくないのではないか、という考え方が出でています。たとえば、私たちが今生きている日本の社会に焦点を合わせ、現代日本語における「宗教」という言葉が西洋のreligionの訳語としてつくれていった過程や、そのreligionをめぐる考え方 자체を日本の社会がどの

ように受け入れていったのか、その試行錯誤に目が向けられるようになつてきているわけです。

私は宗教学のなかでも近代の日本、特に明治から戦前にかけての時代をメインに取り組みつつ、戦後も視野に入れながら研究を進めているのですが、いま述べたような「宗教」をめぐる参考考という流れのなかに、自分の研究も位置づけることができると思います。具体的な研究対象として、近代日本におけるキリスト者や、その言説に影響を受けながら自らの考えを深め、発言していく仏教者などを取り上げて論じてきました。

先程「宗教」という語が訳語として成立したといいましてが、これについて、もとからあつた日本的な宗教性のようものが、近代になつて日本にもたらされた西洋的・キリスト教な「宗教」に塗り替えられてしまつたという考え方をされる方もおります。たゞ私としては、同時代的にも、そしておそらくは今でも、そこまで白黒がはつきりしていわけではなく、いろいろと混ざり合つてきていると考えています。私の研究についていえば、キリスト者や仏教者といった当時の宗教者たちが

新たな「宗教」という概念に触れ、これについて思考し、その考えを公表するということが行われ、それらがお互いに影響を与えながら、折り重なり、積み上がっていくことで再帰的に「宗教」という概念が構成されていったプロセスに注目してきたといえるでしょう。

これを受けて、明治の世になつてから現在までの150年以上のあいだ、外からもちこまれた「宗教」という考え方方がどう捉え直されながら現在に至っているのか、何がどう変わってきたのか、ということを考えることができます。戦後のこと遷を遂げた明治期の宗教者たちの言説が、その後、現在に至るまで、どう捉え直されてきたのかを見ることで、日本における「宗教」のあり方とその変化を観察することができるだろうと踏んでいるからなのです。近代の研究でやらなければならぬことが非常に多く、なかなか手が回らずにきてしまつたというところは正直あるのですが……（笑）。それでもなんとか戦後まで含めて考えてみたいと、目下研究を進めているところです。

「教えを信じる」ことへの解釈の違いが生む「無宗教」という考え方

こうした議論のひとつとして、もう一点、読者の皆さんにお尋ねするとすれば、「宗教とは、その教えを信じるものである」というイメージを抱いていませんでしょうか。日本社会においてはそこまで教えや教義を信じる人がいないから無宗教的だ、というような考え方にも結びつく宗教イメージですね。

しかし、「宗教といえば教えを信じるものである」というセオリー 자체がプロテスタン・キリスト教的ではないかということが、近年の宗教学の研究でいわれています。聖書を読み、その教義を自分で咀嚼して理解し、実践していくくというプロテstant・キリスト教の理念が、ある意味宗教のモデルとして設定され、それが他に投影されていったという歴史上の出来事がありました。これが近代の日本でも生じ、日本の「宗教」の見方に影響を与えたのです。

しかも実際のプロテstant・キリスト教においては、教えや教義を信じるかどうかとは別の次元で、例えば教会实践に足を運ぶことによって宗教の共同体に包摂されるといった、弾力性のある宗教実践の様相が見て取れます。しかしながら、純粹に、あるいは過剰に「教えを信じる」ことが強調された時に、そうした共同体的な要素にはあまり目が向けられず、純粹に、あるいは過剰に「教えを信じる」ことをしていかなければなりません。その影響は今でもあります。その影響は今でもあって、それゆえに「教えを信じる」ことをしていかなければなりません。

宗教者ではないといった考え方や、「日本社会は無宗教だ」というような物言いが出てくるようになります。と、いえるのではないかでしょうか。初詣やお墓参りといった日本に住む私たちにとって身近な儀礼的行為が、宗教的な側面をまったくもたないとは到底いえません。かといって先ほど申し上げたように、日本には、外から持ち込まれた「宗教」ではない、日本的な宗教性がもともとあるのだと開き直ってしまうのも、近代以降の概念の変遷を捨象してしまうことになってしまいます。宗教という概念をめぐるさまざまな絡み合いがあり、普段はなかなか自覚しないようなズレやギャップというものが、明治以降に大きく広がってきたのではないかということを、冷静に見ていくことができれば——と、私としては考えているのです。

このような観点において私が宗教に関心を抱くようになつたのには、それこそなかなか一言ではいえない経緯があるのですが、インターネットの後編ではそのあたりにも触れつつ、明治以降における宗教者たちの「弁証論」などについて考えてみたいと思います。「宗教」という概念が醸されていく時代において、キリスト者たちは、あるいは伝教者たちは、どのように相手を非難し、自らを擁護したのか。いまの物言いといえば、ディスり合いですね(笑)。そのありようの一幕も合わせて、お伝えしたいと思います。

研究者に聞く



私が専門的に研究しているのは、アントレプレナー・シップというものです。これによる意志と諸活動」という意味合いをもつ言葉ですが、これは「新しい事業を創造する」という意味合いで理解していただければ、アントレプレナー・シップは――たとえ耳みがないという人であっても――現代社会に暮らす多くの人々にとって重要なものであるはずだと、私は考えております。

アントレプレナー・シップという概念が含む活動は広範囲にわたります。わかりやすくいえば、スタートアップやベンチャーエンターテインメント企業などはベンチャービジネス呼ばれている、起業者たちによる新しいハイテク企業のほうを挙げることができます。現在広く知られている企業も、もともとはスタートアップだったという例が多くあります。アメリカであればGAFAM（Google、Apple、Facebook、Amazon、Microsoft）や、ディズニー、日本国内ならびに天グループやディー・エフ・エーですね。こうした企業第4次産業革命（インターネット、データベース、モバイル、リードバンド、などの新技術が生まれ、全国各地で産声を上げた新しい領域で、革新的な製品サービスが、

ノ 教育と未来の起業

経済学部・小野正人 教授

を市場に普及させて巨大企業に成長し、経済社会をけん引しています。今世界中で注目を浴びているA.I(人工知能)には年間10兆円を超える資金がスタートアップに投資されていますから、これからも驚くような企業が生まれてくるでしょう。

一方で私は、こうしたハイテク企業を興すことが、アントレプレナーシップではないとも思います。もちろん最先端のテクノロジーを用いたビジネスは非常に意義深いものですが、それと同時に、アントレプレナー・シップはより幅広い分野にひろがるべきであり、各所で新しい価値を創出する活動が重要になっていくと考えています。

地方をはじめとした公的な組織においては、高齢化・人口減少社会・地方再生といった課題に対応した新しい仕組みや事業を創り出していく必要があります。たとえば、地方でシャッターが軒並み閉まっているアーケード商店街の再生といった事例もアントレプレナー・シップの一環としてとらえることができる。あるいは、いま震災と豪雨の被害からの復興を目指す能登という地域に寄り添う、そして再生のための持続的な活動といふものはどのようにして実現可能なのか。さらにいえば、大企業においてもベンチャービジネスを活用して新事業を取り組むコーポレート・ベンチャリングという手法が浸透

しています。そうした各所で新しい課題に取り組む仕組みや事業を創り出していく行動もまた現代的なアントレプレナーシップだと私は考えています。

したがって、新しい事業を創造することについて来たる世代に伝え教えるアントレプレナー教育は、ハイテク企業で働くためだけではなく、広く大学生のキャリア教育と連関することが望ましいのです。大学生のみならず高校生であっても、自分で新たに事業を興したい、あるいは父親の会社を継ぐけれども何か新しいビジネスを起こしてみたらい、という思いを抱く人の話は最近よく耳にするようになりました。私がアントレプレナー教育に携わる場合も、念頭にあるのはこうした若い世代の人々です。

そもそも、昭和の時代とは将来のキャリアに対する思いがまったく異なります。できるだけ大きな企業に就職して、それから定年まで勤めあげるというようなビジョンを描く人はどんどん少なくなっています。変動著しく将来を予知できない現代社会で数十年にわたるキャリアを構築していく。変動著しく将来を予て、アントレプレナー・シップを学ぶことは、リスクを合理的にとらえて対処する重要性を理解し、その能力を習得することができます。

多知困難な現代社会でのキャリア構築に重要な能力習得を

私が専門的に研究しているのは、アントレプレナーシップというものです。これは文脈や人によってさまざまな意味合いをもつ言葉ですが、ここでは「新しい事業を創造する意志と諸活動」という意味で理解していただければと思います。このアントレプレナーシップは——たとえ耳などがないという人であっても现代社会に暮らす多くの方々にとって重要なものであるはずだと、私は考えているのです。

アントレプレナーシップという概念が含む活動は広範囲にわたります。わかりやすいところでいえば、スタートアップやベンチャー企業、あるいはベンチャービジネスと呼ばれている、起業者たちによる新しいハイテク企業の活動を挙げることができます。

現在広く知られている大企業も、もともとはスタートアップだったという例が多くあります。アメリカであればGAFAM (Google、Apple、Facebook、Amazon、Microsoft) やエヌビディア、日本国内ならば楽天グループやディー・エヌ・エーですね。こうした企業は、第4次産業革命（インダストリー4・0）とも呼ばれる時代を象徴する存在です。世界各地でインターネット、ブロードバンド、モバイル、DXなどの新技術が生まれ、その領域で産声を上げた新しい企業が、革新的な製品サービスを市場に普及させて巨大企業に成長し、経済社会をけん引しています。今世界中で注目を浴びているAI（人工知能）には年間10兆円を超える資金がスター・アップに投資されていますから、これからも驚くような企業が生まれてくるでしょう。

一方で私は、こうしたハイテク企業を興すことが、アントレプレナーシップではないとも思います。もちろん最先端のテクノロジーを用いたビジネスは非常に意義深いのですが、それと同時に、アントレプレナーシップはより幅広い分野にひろがるべきであり、各所で新しい価値を創出する活動が重要になっていくと考えているのです。

地方をはじめとした公的な組織においては、高齢化・人口減少社会・地方再生といった課題に対応した新しい仕組みや事業を創り出していく必要があります。たとえば、地方でシャッターが軒並み閉まっているアーケード商店街の再生といった事例もアントレプレナーシップの一環としてとらえることができる。あるいは、いま震災と豪雨の被害からの復興を目指す能登という地域に寄り添う、そして再生のための持続的な活動というものはどのようにして実現可能なのか。さらにいえば、大企業においてもベンチャー・ビジネスを活用して新事業を取り組むコーポレート・ベンチャーリングという手法が浸透

学部・小野正人 教授

来の起業

しています。そうした各所で新しい課題に取り組む仕組みや事業を創り出していく行動もまた現代的なアントレプレナーシップだと私は考えています。

したがって、新しい事業を創造することについて来たる世代に伝え教えるアントレプレナー教育は、ハイテク企業で働くためだけではなく、広く大学生のキャリア教育と連関することが望ましいのです。大学生のみならず高校生であっても、自分で新たに事業を興したい、あるいは父親の会社を継ぐけれども何か新しいビジネスを起こしてみたい、という思いを抱く人の話は最近よく耳にするようになりました。私がアントレプレナー教育に携わる場合も、念頭にあるのはこうした若い世代の人々です。

そもそも、昭和の時代とは将来のキャリアに対する思いがまったく異なります。できるだけ大きな企業に就職して、それから定年まで勤めあげるというようなビジョンを描く人はどんどん少なくなっている。変動著しく将来を予知できない現代社会で数十年にわたるキャリアを構築していくことになる人たちにとって、アントレプレナーシップを学ぶことは、リスクを合理的にとらえて対処する重要性を理解し、その能力を習得する機会につながるものだと考えます。

アントレプレナーシップの探求における四つのアプローチ

さて、だいぶ話が先に進みました。そこでアントレプレナーシップの根本に、今一度立ち戻つてみたいと思います。

現代において重要性をもつアントレプレナーシップを探求するにあたっては、大きく分けて四つのアプローチがあるのではないかと思います。

まずは、経営学的なアプローチ。読んで字のごとく、スタートアップやベンチャーと呼ばれる企業の経営はどのようすればうまくいくのか、経営学の視点から考えていくというものです。従来の大企業の経営を分析するように、事業計画などを分析していくわけですが、たとえば経営組織論からみれば、既存の大規模な組織を分析するのと、少人数での起業を分析するのでは当然視点は異なってきます。また企業金融の側面からは、事業を発展させていくための資金調達というのも、スタートアップやベンチャーにとって重要なトピックです。

次に、広範囲のアントレプレナーシップの研究。先ほど述べた通り、既存の大企業や中小企業や地域において新しい事業創造のありようを探る

「 」

の視点が必要になっているからです。

そして、人材教育です。新事業に取り組むためのアントレプレナーシップ、レブレナー教育の価値が高まり、世界各地の大学やビジネススクールで講座が増えていきます。東大が70年ぶりに作る新学部「カレッジ・オブ・デザイン」も新たな価値の創出と社会課題解決をミッションにしており、起業家教育と一緒に軸の発想だと思います。

私はこれら三つの観点にも興味・関心を抱き、部分的に取り組んできているのですが、重点的に研究を進めているのは、もうひとつのアプローチです。

傾注してきたその問いを二言で表すならば「新企業を輩出するシステムはどういう形で形成・発展してきたのか」というものになります。アントレプレナーシップの推進を可能にする社会構造を歴史的な観点から掘り下げていく——アメリカを中心と考えてきた研究——その詳細については、インタビューの後編で話を続けます。



令和8年度 学費一覧

学部

区分	入学年度	入学金	授業料	施設設備費	維持運営費	合計
文 學 部	令和8年度	240,000	830,000	210,000	10,000	1,290,000
		240,000	850,000	250,000	10,000	1,350,000
經 濟 學 部	令和7年度	—	830,000	210,000	10,000	1,050,000
		—	850,000	250,000	10,000	1,110,000
法 學 部	令和2~6年度	—	760,000	210,000	10,000	980,000
		—	800,000	250,000	10,000	1,060,000
神 道 文 化 學 部	令和元年度以前	—	700,000	201,000	10,000	911,000
		—	—	—	—	—

備考: 再入学者の入学金については半額とする。

別科

入学年度	入学金	授業料	施設設備費	維持運営費	実習料 (入学年度のみ)	合計
令和8年度	145,000	420,000	81,000	10,000	6,000	662,000
令和7年度以前	—	420,000	81,000	10,000	—	511,000

令和8年度学費は次の通りです。

(単位: 円)

令和8年度学費について

令和8年度観光まちづくり学部入学生から学費を別表の通り改定いたします。なお、在学生の学費改定は行いません。

改定額は、年間授業料を50,000円増額いたします。今回の学費改定により、観光まちづくり学部の特色を生かした教育・研究のさらなる発展・維持充実に努めるとともに、資源価格の高騰等による収支の圧迫を軽減させ、大学の永続性を確保してまいります。

専攻科

(単位: 円)

出身別	入学年度	入学金	授業料	施設設備費	維持運営費	合計
本学卒	令和8年度	120,000	830,000	105,000	10,000	1,065,000
		240,000	830,000	210,000	10,000	1,290,000
本学卒	令和7年度	—	830,000	105,000	10,000	945,000
		—	830,000	210,000	10,000	1,050,000
本学卒	令和6年度	—	760,000	105,000	10,000	875,000
		—	760,000	210,000	10,000	980,000

備考: 本学出身者の入学金および施設設備費は半額とする。

大学院

(単位: 円)

区分	出身別	入学年度	入学金	授業料	施設設備費	維持運営費	合計
前期課程	本学卒	令和8年度	100,000	505,000	100,000	10,000	715,000
		令和7年度以前	—	505,000	100,000	10,000	615,000
後期課程	他大学卒	令和8年度	200,000	505,000	200,000	10,000	915,000
		令和7年度以前	—	505,000	200,000	10,000	715,000
本学卒	全入学年度	—	505,000	—	10,000	515,000	
		令和8年度	100,000	505,000	100,000	10,000	715,000
他大学院前期了	他大学卒	令和7年度以前	—	505,000	100,000	10,000	615,000
		令和8年度	200,000	505,000	200,000	10,000	915,000
他大学卒	令和7年度以前	—	505,000	200,000	10,000	715,000	

備考: 1. 授業料、施設設備費、維持運営費は在学中毎年度納入するものとする。

2. 本学出身者の入学金および施設設備費については次の通りとする。

イ. 前期課程 半額
ロ. 後期課程 本学前期課程修了者は徴収しない。本学学部出身者で、他大学前期課程修了者は半額。

i-インフォダイジェスト



大学からのお知らせ

卒業式、卒業証書・学位記並びに修了証書授与式について



令和8年3月22日(日)

[卒業式]

場所: グランドプリンスホテル新高輪 宴会場「飛天」

[対・時]

- ▶ 経済学部・法学部・人間開発学部 = 10時～
- ▶ 文学部・神道文化学部・観光まちづくり学部・専攻科・別科 = 13時～

[卒業証書・学位記、修了証書などの授与]

[対・時・場]

- ▶ 経済学部・法学部 = 13時～、渋谷キャンパス
- ▶ 人間開発学部 = 13時30分～、たまプラーザキャンパス
- ▶ 文学部・神道文化学部・専攻科・別科 = 16時～、渋谷キャンパス
- ▶ 観光まちづくり学部 = 16時30分～、たまプラーザキャンパス

※参列は卒業生・修了生のほか家族等2人までとなります。
問: 総務課 (☎03・5466・0111)

令和8年度 一般選抜入学試験のご案内



内令和8年度の一般入学試験を下表の日程で実施します。入学試験制度のV方式とA日程同時出願や、複数学科を併願した場合、2回目以降の受験料を割引する応援割も用意。詳細は本学HP(二次元コード)でご確認ください。

※本学の一般入試は受験ポータルサイト「UCARO」上でのインターネット出願となります。

問: 入学課 (☎03・5466・0141)



令和8年度 一般選抜入学試験日程

入学試験制度	試験日	出願期間(消印有効)	合格発表
V方式(大学入学共通テスト利用入学試験)	1月17日(土)～18日(日) 本学個別試験なし	【前期】1月5日(月)～16日(金) 【後期】1月5日(月)～22日(木)	2月14日(土)
	2月2日(月)		
	2月3日(火)		
A日程(全学部統一)	最高得点科目重視型 学部学科特色型 英語外部試験利用型	2月4日(水)	1月5日(月)～22日(木)
B日程(後期)	3月2日(月)	1月5日(月)～2月20日(金)	3月11日(木)

※試験科目などの詳細については本学HPでご確認ください。

博物館

料無料 時間10～18時(最終入館17時30分)。下記企画展開催中は不定休。開館状況を博物館HPで確認ください。

※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

企画展「性別越境の歴史学」

人類の最も自然的な側面でありつつ、極めて文化的な性格を持つ「性」。時に人々は、性別の垣根を越境することで異能を身に付けられるとさえ信じてきました。本展では、歴史的な「性」に対する意識を観察した上で、日本文化における性の多様性について考えます。

日12月6日(土)～令和8年2月23日(月祝)

場博物館企画展示室



受験に学ぶ「癒やし3力条」

新富 康央
しんとみ・やすひさ
学校法人国学院大学特別参事。
人間開発学部初代学部長、専門
は教育社会学、人間発達学。新
しい時代の子育て論には定評。



近くて遠い? 遠くて近い? そんな親の気持ちや子どもの気持ちと一緒に考えませんか? 新富名誉教授による子育てエッセーを隔月でお届けしています。

感想や新富名誉教授への質問、講演依頼などございましたら広報課までお寄せください。

男子卓球部

10年ぶり1部昇格 入れ替え戦で劇的勝利

関東学生卓球リーグ戦で2部に所属する国学院大学男子卓球部が、9月10日から12日にかけて港区スポーツセンター（東京都港区）で行われた秋季リーグ戦に臨んだ。

同部は初日、東洋大学に4-2、日本体育大学に4-3でそれぞれ激戦を制した。勢いに乗った翌日も順天堂大学に4-1で勝利。全勝対決となった駒沢大学には1-4で敗れたものの、最終日の大正大学戦に勝利し、2部リーグ2位で1部昇格をかけた筑波大学との入れ替え戦に進出した。

入れ替え戦は10月4日、駒沢オリンピック公園総

合運動場（東京都世田谷区）で実施された。1番手で高橋拓己選手（法2）が関東学生チャンピオンを相手にセットカウント0-2と追い詰められながらも、そこから3セットを奪い返し逆転勝利した。その後、両チームが勝ちを積み重ねる接戦となり、勝負は最終戦へもつれ込んだ。

主将の佐山寛大選手（中文4）は、チームの命運をかけてコートに立ち、冷静かつ力強いプレーで相手選手を圧倒し3-0で勝利。この劇的な勝利の結果、国学院大学は4-3で筑波大学を破り、10年ぶりとなる1部リーグ昇格を果たした。



7番手で勝利を収めた佐山選手

第15回観月祭

学生が舞、演奏を披露



息の合った演奏で厳かな旋律を披露

神道文化学部が主催する第15回観月祭が10月18日、渋谷キャンパスで開催された。観月祭は、平安時代から続く十五夜に満月を観賞する「中秋観月」の伝統に由来する行事で、例年、青葉雅楽会（雅楽）、みすゞ会（神楽舞）、瑞玉會（祭式）、蔚黃會（衣紋着装）、禮法研究會（礼法）、若木睦（神輿）

の、六つの神道系サークルからなる神道六部会の学生が中心となり斎行している。当日は5号館ピロティの特設舞台で、学生たちが日本伝統の管絃、祭祀舞、舞楽を古式ゆかしく披露した。

演目の冒頭、学生が舞台前に神饌を捧げ、祭祀を執り行った。続く管絃では、合奏の前に音律を調べ

る「壱越調 音取」に続き、「胡飲酒 破」「酒胡子」「武徳樂」の各曲が披露され、龍笛や笙などの息の合った演奏は、会場を荘厳な雰囲気に包み込んだ。

祭祀舞では、故臼田甚五郎・本学名誉教授が作詞した、自然の恵みに感謝する「豊栄舞」と、世の中の平和と平穏を願う「浦安の舞」が披露された。色鮮やかな装束に身を包んだ学生たちが一糸乱れぬ舞を奉納した。

舞楽では、舞台を清め祓う意味を持つ「振鉾」や、「延喜樂」「五常樂 急」を厳かに舞い、約2時間の演目が終了。約半年間にわたり稽古を重ねてきた学生たちが観客を魅了し、教職員や学生の家族、一般の観客らは、学生たちの演奏と舞に惜しみない拍手を送った。

渋谷区長への施策提言コンペ

学生が渋谷区長へ熱弁

今年で9回目となる「渋谷区長への施策提言コンペ」が10月29日に開催された。35組の応募があった中、1次選考を通過した5組が審査員に対してプレゼンテーションに臨んだ。審査員は長谷部健・渋谷区長=写真中央、早川大輔・サッポロビール株式会社法人・地域創生統括部長、石川則夫・副学長（文学部教授）の3人が務め、それぞれの施策提言に熱心に耳を傾けた。

開会に先立ち、石川副学長は、「この機会が、渋谷区と国学院大学の絆、そして学生らの学びをより深めることを期待している」とあいさつ。学生たちは、渋谷区が抱える現状や課題を踏まえつつ、「ごみ問題」や「喫煙所」、「オーバーツーリズム」、「本」などに焦点を当て、それぞれの観点から考えた施策を、熱意をもって発表した。

審査の結果、山田瞬さん（法3）、神保凜汰郎さん（法3）が提案した「行政×小売店×消費者 ハチペイを活用した有料ゴミ箱から



始まるクリーンシティ渋谷」が渋谷区長賞に選出された。他にも、今澤心春さん（経営2）が提案した「SHIBUYA CONNECT—学生が世界に繋ぐ新たな渋谷のカタチー」がサッポロホールディングス賞、柳澤志門さん（経営2）が提案した「待たない！疲れない！あの人気キャラとサクサク観光できるAIナビゲーションアプリ」が学長賞に選ばれた。

最後に表彰式が行われ、長谷部区長が参加した全5組のグループへ講評の後、総評として「充実したアイデアが多くあり、刺激を受けた」と称賛のコメントを贈った。

第143回 若木祭

来場者でにぎわう

国学院大学の学園祭・第143回若木祭が、11月1日から3日までの3日間にわたり、渋谷キャンパスで開催された。

期間中、キャンパスモールと5号館ピロティでは、全学援団や体育系部会の演奏や、吹奏楽部の演奏、ダンスサークルによるパフォーマンスなどが披露され、来場者は足を止め、学生たちの活気あふれる発表に声援・拍手を送っていた。120周年記念2号館・3号館前のキャンパスモールでは、部会やサークルがさまざまな模擬店を設け、学生たちは創意工夫を凝らしてつくった品々を提供した。

学生たちによって華やかに飾り付けられた校舎内では、文化・学術系団体の展示や、音楽サークルやフラメンコサークルのステージ、神道系サークルによる雅楽や能の発表会などが行われ、学生たちの日ごろの成果が披露された。

最終日となる3日には体育連合会の主催によるお笑い芸人ライブで会場を盛り上げたほか、午後3時からは後夜祭が行われた。



K:DNA ——創立143年を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

陸上競技部

全日本大学駅伝4位 野中選手が3区 区間賞

秩父宮賜杯第57回全日本大学駅伝対校選手権大会が11月2日、熱田神宮西門前（名古屋市）から伊勢神宮内宮宇治橋前（三重県伊勢市）までをつなぐ全8区間・106.8キロのコースで開催された。オープン参加を含む全27チームが争う中、国学院大学陸上競技部は5時間9分45秒で、4位でゴールした。1区の尾熊迅斗選手（健体2）は快調な走りでトップとわずか1秒差の区間3位で襷をつないだ。2区の辻原輝選手（史3）は粘り強く前を追いかけ、7位で3区の野中恒亨選手（健体3）へ。野中選手は他大学の選手と並走しながら先行する大学を次々と捉え、区間賞の快走でチームは2位へ浮上。3年連続で4区を任された高山豪起選手（法4）は激しい首位争いの末、区間2位の好走で2位を維持した。後半戦、5区は三大駅伝初出走となる飯國新太選手（法2）が序盤から下位チームからの猛追を受けながらもトッ

プ争いを繰り広げ、区間2位と健闘。6区では同じく三大駅伝初出走の浅野結太選手（経営2）が区間4位、総合3位で中継所に飛び込んだ。各大学のエースが集う7区では青木瑠郁選手（健体4）が総合4位で最終8区の上原琉翔選手（健体4）につないだ。上原選手はレース序盤で一時3位に再浮上したが、終盤は脇腹をおさえながら懸命に前を追いかけ、最終的に総合4位でゴールした。

レース後、区間賞を獲得した野中選手は「実力のある外国人選手と戦いたいと自分から志望し、その役割を果たすことができたと思う。楽しみながら、うまく走ることができた」と語った。

同部は、令和8年1月2日、3日には東京・大手町の読売新聞社前から箱根・芦ノ湖までを往復する箱根駅伝に出場する。



区間賞を獲得した野中選手(写真・月刊陸上競技)

ゴールへ向かう上原選手

柔道部

全日本学生柔道体重別団体 3位

体重別団体での学生日本一を争う男子第27回・女子第17回全日本学生柔道体重別団体優勝大会が10月18、19日にベイコム総合体育館（兵庫県尼崎市）で開催され、国学院大学柔道部は男子の部で3位に入賞した。男子の部は54大学が参加。代表選手7人による点取り式のトーナメント戦で実施された。同部男子は1回戦シードとなり、2回戦で帝京平成大学を相手に、2-1で順当に勝ち上がった。3回戦は法政大学と対戦し、先鋒の清水雄護選手（経3）、中堅の小林開道選手（法4）、三将の宮部蓮匠選手（観まち1）、副将の荒川琉正選手（健体1）がそれぞれ一本を決め、4-1で勝利。準々決勝では桐蔭横浜大学と対戦。次鋒の宮部真臣選手（観まち4）と、副将の荒川選手が技ありで勝利し2-2となり、内容勝ちで勝利した。準決勝では東海大学と対戦して0-3で敗退。2年連続の3位入賞となった。

11月1日、2日には、階級別日本一を決める国内タイトルの一つである講道館杯全日本柔道体重別選手権大会が千葉ポートアリーナ（千葉市）で開催された。同部からは6人が出場し、60kg級では宮部真臣選手、73kg級では荒川選手がベスト16となった。また、90kg級では院友の中村俊太選手（令7卒・133期健体、センコー株）が準優勝を果たした。



全日本学生柔道体重別団体優勝大会後の柔道部男子ら（同部提供）

硬式野球部

東都大学野球1部秋季リーグ2位

東都大学野球1部秋季リーグ戦が10月24日に全日程を終え、国学院大学硬式野球部は2位となった。

第4週は亜細亜大学と対戦。14日の第1戦は、0-0で延長タイブレークにもつれ込み、十回表に先制点を許す展開となった。十回裏に主将・宮坂厚希選手（健体4）が犠打を成功させ、1死二・三塁とすると、続く黒木日向選手（健体4）がスクイズを決め、相手のミスもあり2点を獲得。2-1で勝利した。

翌日の第2戦は1-7で落としたものの、16日の第3戦では再び延長タイブレークに突入した末、十回裏に赤堀颯選手（経営3）がタイムリーツーベースヒットを放ち、1-0で勝利した。

第5週は、駒沢大学と対戦。21日の初戦は、0-0のまま今季5回目の延長タイブレークへ突入。十回表、1死満塁の場面で、横田悟選手（法2）がショートへのタイムリーヒットで1点を追加すると、続く赤堀選手がレフトへのタイムリーヒットで追加点を加えた。さらに2死満塁の場面で、宮坂主将の打球をセカンドが捕球エラーし1点を奪い取った。投げては先発の當山渚投手（経営4）が六回途中までを無失点に抑える好投を見せ、後続の飯田真渚投手（健体4）も三回途中までを無失点で相手を抑えた結果、3-0で勝利した。

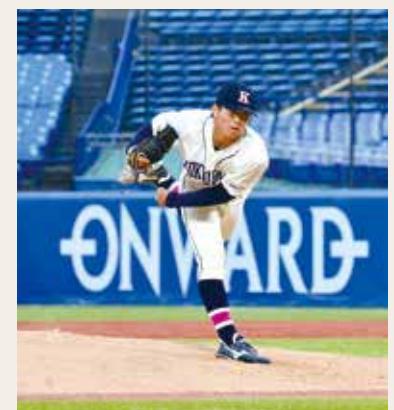
翌日の第2戦では、四回裏に2点、五回裏に1点を獲得。六回裏には調祐李選手（史4）がレフトへのツーベースヒットで出塁、宮坂選手が犠打で送り、1死三塁とすると、立花祥希選手（健体4）のスクイズで1点を加えた。その後、ヒットや相手ピッチャーの四球で2死満塁とすると、緒方漣選手（健体2）のレフ

トへのタイムリーヒットで1点、中西流空選手（経4）がライトへの満塁ホームランを放ち、この回6点を奪取。9-0と快勝し、勝ち点1を収めた。

この結果、リーグを通して8勝3敗・勝ち点4の2位で秋季リーグを終えた。個人成績では、飯田投手が最優秀投手と、防御率0.00で最優秀防御率に選ばれたほか、當山投手が敢闘賞に、ベストナインには捕手の立花選手、遊撃手の緒方選手が選ばれた。



最優秀投手と最優秀防御率の
2つのタイトルを獲得した飯田投手



敢闘賞を受賞した當山投手